
狼さんと弱虫猫 勇気はへたれを強くする

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼さんと弱虫猫 勇気はへたれを強くする

【NZコード】

N9782M

【作者名】

刹那

【あらすじ】

へたれで弱虫な主人公。その子が好きになった子は、狼の負け犬と呼ばれ、みんなに嫌われていた。

弱虫な主人公と狼さんのひととき

(前書き)

第四回、おもにつき余興小説。
ちょっとながいですが、興味があつたらお読みください。

僕の声は届かない。

君は高いところに居過ぎる。

僕はそこまで上ることなんて出来ない。

僕は、へたれで弱虫で…。

でも、君の前なら勇気を見せれる。

な～んて。言えるわけない。

それどころか勇気を出せるわけがない。

「ひ～」¹この思考に至るのが僕のへたれで弱虫なところなんだらうな。

「どうした？顔色悪いぞ。つていつもそうか
ボーと外を見ていた僕の顔を覗きこみ、勇樹は言った。

「そんなことないよ。いつも元気いっぱいだよ」

だけど、僕は彼の顔を見ずに答えた。

勇樹も僕が見ている場所を一緒に覗き込む。
その先には。

一人の少女が立っていた。

「またあいつかよ。やめとけって言つただろ。あいつは怪物だ

「怪物なんかじゃないよ！！」

やけになつて叫んでしまつた。

クラスの子達の視線を感じる。

「じゃあなんなんだよ！あの頭のよさは！天才なんてレベルじゃな

いぞ！もう化け物、怪物の類だ！」

なんの話をしているのか周りの生徒達も感づきだしたようで、ああ、あいつか、とか、狼の負け犬、とか喋りだした。彼女が化け物扱いされるのがどうしても嫌だつた。でも、これ以上言えない。

言つたら、何か言われるかもしれないから。苛められるかもしないから。

僕は最低だ。自分の事しか考えない弱虫野郎だ！

キーンコーンカーンコーン。

放課後を告げる鐘が鳴る。

「まあ、好きにしろよ」「よ

勇樹は呆れながら、バックを持って出て行つた。

もう一度、外を見る。

が、彼女の姿は無い。

「はあ……」

ため息を漏らしながら、放課後にも関わらず机に突つ伏した。

「はー！！！」

勢い良く頭を上げる。
寝てしまつていた。

外は真っ赤な夕焼けに染まり、紅色で彩られていた。

何やつているんだ僕は！

すぐさま教室をでる。

静かな廊下を超特急で走りぬける。

一階に下りて校門に向かおうとした時。

「化け物！消えろ」

体育館の方から女性徒の声が。

「死んじゃえ！失せろー！」

「それも一人じゃない。」

「この学園からいなくなれ！狼の負け犬」

狼の負け犬という言葉を聴き、頭に衝撃が走った。

今、苛められてる子は…

星伽鈴音。この学園に転入してきた天才女性徒。

いますが助けなきや！

だが、体は動かず、その場に立ち尽くす。

くそ！動け動け動け！

でも…。

止まること無い鈴音さんへの暴言。

僕はその場で聞くしか出来なかつた。

しばらくすると体育館の裏から五人の女性徒が姿をあらわし、走つていいく。

僕は、すぐに階段の影に隠れる。

女性徒たちがいなくなるのを確認すると、体育館の裏にダッシュした。

そこには、孤高の狼少女がへたり込むように座つていた。

僕は狼少女こと鈴音さんに駆け寄つて話しかけた。

「あの、大丈夫？」

初めての対面だ。

僕が想いを寄せている狼少女はなにも答えない。

ゆつくり顔を覗き込もうと顔を近づけると鈴音さんはキリッと僕を睨んできた。

「ひつ！」

つい悲鳴を上げてしまつ。

ほんとへたれだ。

「くだらない。馬鹿馬鹿しい。反吐ができる」

切ない三連続コンボを言い放つと鈴音さんは立ち上がり、その場を去つていった。

僕が助けなかつたから…。
とても、悔しかつた。

次の日

深く考えすぎて、寝付けなかつた。

だから今日は、早めに登校した。

いつも早いのにこれより早いとなると他の生徒の姿すら無い。
いくらなんでも、早すぎたか…。

ふと、中庭を見る。

そこには星伽鈴音さん^{（ハヤカ・ルン）}が立つていた。

鈴音さんも早いなあ…。

待つてよ。いまなら話せるチャンスじゃないか！

めいぢちない足取りで狼少女のもとに向かう。

「お、おはよ！」

僕の挨拶に鈴音さんは

「おはよ～」

と返してくれた。

なんという快感！たまらない。

「なぜ、君は私を毛嫌わない？昨日から不可思議に思つていたのだが…」

昨日から僕のことを…あああ、僕もう死んでも良い。

「そ、それは…さ、君と、その…」

「私と？」

「えつと…」

「早く言え…」

「はい。と、友達になりたくて！」

「友達？？？」

危ない。好きですって言つてしまつといふだつた。

- うん

機嫌損ねちゃつたかな？

「いいだろう！ 気に入つた。友達になろう」

え？ やつたやつたやつたやつたやつたやつたああ

卷之三

「ウル」

鎌倉さんせ喜んでくれてるみたいだ

時間も空いたのでお隣さんが駆校してお

「すまない、私はもう行く」

-え?ちよ-

鈴置さんは僕が言葉を発する前に校舎へと走っていった。

まあ、良いか！

友達になれたことだし。

僕も浮かれた気分で校舎に入つていつた。

放課後

僕はしばらく教室にいた。

だれも校舎にいなくなるまで。

本居宣長著「日本書紀傳」に、櫛ノ木の歴史が記載されている。

あわて、また黙りこんだ。

鈴音さんを苛める女性徒の声が。

僕は、深呼吸する。

そして、思いつきり駆け出し、体育館の裏に行き、叫んだ。

「やめろおおおおおおお

それを聞いた女性徒はこちらに振り返り、顔をしかめながら、僕のいる逆方向に走つていった。

その女性徒たちの奥にいた狼少女はこちらをビックリしながら見ている。

「だ、大丈夫？」

鈴音さんに近づく。

「う、うむ。しかしビックリだな。まさかお前が

「僕は、鈴音さんの友達だからね」

勇気を振り絞り、言つてみた。
顔が真っ赤になるのを感じる。

恥ずかしい。

「ふ、ふはははは。面白いな友達と語つのは、お前はなんと言つた

前だ？」

「え？さいじょうたいいち西条太一」

「太一か。よし、覚えた」

鈴音さんは微笑んだ。

数日後

「そこで弱虫猫はカラス達に言いました

その日、僕は学園の図書館で鈴音さんに童話を読んでいた。

「狼さんを苛めるな！…どつかいけつと

なんで図書館かというと、鈴音さんは本が大好きらしい。特に童話が。

「カラス達はビックリして飛んでいました

だから、僕は童話を読んでいる。

「大丈夫？狼さん。猫は聞きました。大丈夫だ、ありがとうと狼さんは答えました」

「まるで私達のようだな」

鈴音さんが口を挟んできた。

「うん。そうだね」

僕も頷く。

「まだ、続きがあるだろ？？」

「う、うん。 それから弱虫猫と狼さんはずっと仲良く共に暮らしました。 終わり」

ぱたりと本を閉じる。

「私達もこうなると良いな

「え？」

なんて言つたか聞き取れなかつた。

「何も無い」

「そ、そう？」

僕は頷いた。

そして鈴音さんの顔を見る。

鈴音さんも視線に気づいたみたいでこちらを見てくる。
そして、そつと目を瞑つた。

僕は、顔を近づけ、鈴音さんにキスをした。

一体、どっちが狼なのやら…。

(後書き)

小説上に出てきた童話は実在しません。

やけに話がとんでもありますよね。
すいません。

感想、いただけないでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9782m/>

狼さんと弱虫猫 勇気はへたれを強くする

2010年10月8日13時40分発行